

日本におけるロビンズの導入過程  
——1930年代と1950年代——

小峯 敦

●目的

本報告の目的はライオネル・ロビンズ (Lionel Robbins 1898-1984) の経済思想が、どのように日本に受け入れられたかを探ることである。

●従来のロビンズ像

ロビンズは経済学史家のみならず、経済理論家でも著名な LSE の経済学者である。その名を最も高めたのは『経済科学の本質と意義』(1932年初版、1935年二版)であった。そこで彼は科学たりうる経済学の対象を、<代替的で稀少な手段と、いくつかの目的との関係に関する人間行動>と限定した。この稀少性定義は徐々に強力に広範に受け入れられ、現在では(提唱者の名も知らずに)多くの経済学者が自己規定する概念となっている。それゆえ、ロビンズはその後に永続する主流派の経済学方法論を最も明確・簡略に述べた人物として、そしてその面だけで記憶されることになった。

●多元的ロビンズ

しかしながら既に田中真(1986: 285)、根井(1989: 第4章)、松嶋(2005: 56-57)も指摘しているように、ロビンズ思想は上記の側面だけで判断すべきではない。小峯(2007: 第14章)でわかるように、例えば連邦主義(国際的自由主義)という側面で、ロビンズは同僚兼上司のウィリアム・ベヴァリッジと協働していた。あるいは1935年頃から最晩年の論文(1981)まで、経済科学と政治経済学(または応用経済学)の峻別を説きつつ、後者を用いて総合的な政策判断をするのが経済学者の役割であると主張していた。この思想的コアがあったからこそ、次の二例のような政策関与者としてロビンズは活躍し、しかも貴族の称号を与えられるほど畏敬されたのである。その第1は、第二次世界大戦中に、内閣経済部 **Economic Section** で<経済参謀>として社会保障・雇用・国際通貨という各政策を主導したことである。第2は、『ロビンズ報告書』(1963)の発表である。能力ある者に高等教育の機会平等を、市民権の共通基準の伝達をという理念に支えられ、イギリスおよび西洋諸国の高等教育拡大政策に大きな影響をもたらした。

## ●範囲と方法

このような多層性・多元性をもつロビンズは、日本の経済学界にどのように受容され、批判され、行き渡っていったのか。本報告の範囲（1930年代と50年代）・方法（翻訳と書評）を次のように明らかにしておこう。

## ●翻訳と書評

まずロビンズの著作および論文がいつ・どのように翻訳されたかを明らかにする。背景には、日本における学術雑誌の黎明があるので、杉原（1980）などを参考にしつつ、それをまず概観する。第1期（1900-1920）、第2期（1920-1945）、第3期（1945-1950）、第4期（1950-1970）である。次にロビンズに対する書評および紹介論文を確定し、どのような特徴があるかを確定する。予備的な調査では4冊の著作および3編の論文が翻訳されている。訳者解説などにも気配りする。また早坂（1971: 47）に従い、安井（1933）および中山（1933）による最も初期の『本質と意義』紹介が考察される。ロビンズ導入にとって重要なのは1930年代と1950年代であったことが、既に判明している。

## ●各国伝播の一環

本報告は大まかには Coats 以来の〈経済思想の各国伝播〉というプロジェクトに則っている。一般均衡論については Ikeo（1993）、戦後については八木（1999）、あるいは明治期については井上（2007）など多くの蓄積がある。しかし方法論上・経済政策上に大事なロビンズについては、あるは戦間期については、考察が手薄であった。ロビンズは単に稀少性定義を流布させただけでなく、ケインズ・ハイエク・ベヴァリッジ等との知的交流を果たしている。また LSE いう（他方の極であるケンブリッジと対置されるべき）学問的環境の中心人物であった。その人物の経済思想を、日本の学問環境との関係で深く考察するのは意義深いことであろう。

## ●1930年代（安井と中山）

Robbins（1932）（1933）の出現で代表されるように、LSE で「ロビンズ・サークル」が急速に力をつけていた。池尾（2006: 12）が明らかにしているように、日本の経済学者は様々なルート（海外雑誌・交流教官・外留）によって、最新の動向を掴む努力を重ねていた。ゆえにロビンズの名もすぐに日本に周知

されることとなった。ここでは4つの事例を挙げ、その導入の作用様式を代表させておこう。

第1は安井琢磨(1909-95)である。安井(1933)は確認される限り、最も早い『経済学の本質と意義』の紹介文である。本文の8割程度はその要約紹介であるが、残りにはロビンズ受容の態度が示されている。「方法論…は哲学的思惟一般とともに殆どドイツの學界に委ねられてゐる」(安井 1933: 124)。マーシャルの経済学定義はあまりに「常識的にして安直」であり、メンガー、ウェーバー、アモンといった「一聯の思索」と比べるべくもない。その中で「ロビンズ教授の標題の著書の出現はその「稀少性」の故にだけでも十分に我々の興味の対象となり得る」(ibid.,: 125)。そして「限界効用學説による理論經濟學の基礎づけがロビンズの立場である」(ibid.,: 125-126)。以上の行間から、ドイツに比してイギリス思想を軽んじる基調を前提に、それでも合理的な選択行為、稀少性というロビンズの方法論を重視する立場がはっきりとわかる。実際、1973年に安井がロビンズ本人に東京で会ったとき、1930年代初期のLSEはイギリスに新風を吹き込み、『本質と意義』に「非常に大きな感銘を受けた」(安井 1980: 212)。なぜなら「ロビンズの本の中心テーマは資源の合理的配分を経済学の基本問題とみた」(ibid.,: 52)からである。

第2は中山伊知郎(1898-1980)である。『純粹經濟学』(1933)は最も成功した本であり、多くの一般的読者をも獲得した(中山 1958: 1035)。そこで短いながら『本質と意義』に言及された箇所がある。「この意味の均衡理論の性質については、Robbins, *The Nature and Significance of Economic Science*, 1932を見よ」(中山 1933: 18)という注釈である。中山(1933)は静態と動態という通常の区別ではなく、次のような2つの均衡理論の峻別を重視した。すなわち第1を経済現象の理解・分析のための手段、第2を経済の相互依存関係の理解そのものである。上記の「この意味」は第1を指す。静態と動態という「両者が純粹經濟学として共に均衡理論を基礎として成立する」から「その間に何等の相違も存しない」と判断されたのである。この判断は『本質と意義』の翻訳における序文(1957)でより明瞭となる。シュンペーターの『理論經濟学の本質と主要内容』(1908)よりも『本質と意義』の方が、「より本質的」とされた。なぜならば、ロビンズの本は「稀少性原理によって貫かれた一本」があり、「静態理論と動態理論の本質的な区別はない」(中山 1957: iv)からである。中山はこの確信をロビンズから得たというよりは、自らの正当性を支持する文献

の1つとして挙げたのであろう。

### ●1930年代（気賀と野村）

第3の気賀健三（1908-2002）はミーゼス、ハイエク、ホブハウス等に魅せられた慶應義塾大学教授であった。『経済計画と国際秩序』（1937）への書評が重要である。これは「典型的な英国正統学派の特徴を備えた書物」であり、「徹底的な自由主義の主張が全篇に亘って溢れて居る」（気賀 1937: 131）。戦争や貧困に直面した国民国家の縮小的な防衛に対して、ロビンズは「国際自由主義」（市場による制御と分権化）を唱えることで対抗しようとした。気賀はむしろそのユートピア的性格を咎める筆致を残している。国際的自由主義は「正反対の方向に進む滔々たる世界の大勢に対して如何に役立つであろうか」（*ibid.*: 135）。「自由主義が戦争を確実に回避し得る理由を説明することが出来ない」（*ibid.*: 136）。気賀の自由主義はロビンズに部分的に共鳴した。

第4の野村兼太郎（1896-1960）はクラパム教授の下で学び、イギリスと日本の経済史、および日本の経済思想史という3つの分野で大きな足跡を残した。その中で「理論と実践：最近イギリスにおける経済学方法論争」という論文は、当時の最も詳細な論評である。ロビンズは「英米の学界に経済学の本質について大きな問題を提出した」（野村 1939: 3）。「最近における経済学界の混沌たる状況が理論と実践の間隙から生じたのだった」（*ibid.*: 5）。野村はロビンズに触発された議論で、経済学を科学化するという目標に賛成する。ただしその手続きには反対する。歴史家である野村にとって「対象たる人間の経済行為は1つの歴史的、集団的なものであり」（*ibid.*: 29）、「歴史は1つの総合的現象」（*ibid.*: 32）だからである。歴史家・野村の特長が窺える。

### ●1950年代

1940年代に入り、ゴットル流の政治経済学のみが学界を完全に圧倒した。終戦後の数年は経済雑誌が乱立するなど、混乱期であった。1950年代初頭から混乱は徐々に沈静化し、学会設立や学内紀要の再出発など学術体制も安定してきた。ロビンズの本や論文の翻訳がこのころから出版されることになる。

### ●1950年代（末永と杉本）

富田重夫（1925-）、馬場啓之助（1908-88）、辻六兵衛（1916-?）などの例は

割愛し、ここでは末永隆甫（1918-2004）と杉本栄一（1901-50）を取り上げよう。末永は杉本に最も影響を受け、いわゆる近代経済学の方法論を得意とした。特に『大恐慌』（1933）の所説を取り上げ、「ロンドン学派経済学の統率者」（末永 1950: 4）であるロビンスの思想が批判される。ロビンスは「金利生活者層や貿易資本の利益を客観的には保証」し、「極めて保守的な性格をもつ」。「[「中立的」均衡理論のインプリシットな価値判断が示された」（*ibid.*,: 36-37）。「ロビンスが経済科学においては価値判断の導入を終始拒否しつつ…現実の経済問題について極端な自由主義の立場をとった」（末永 1953: 420）。杉本の表現はここまで批判的ではないが、基本線は同一方向である。まず「ロンドン学派は…イギリスにおけるローザンヌ学派化されたウィーン学派」（杉本 1950: 74）と規定された。一般均衡という理論を武器に、「封建的残滓をもつウィーンの貴族的高踏的な社会のにおいが濃い経済学」（*ibid.*,: 75）となる。金融勢力とつながりがある。「経済学は…実践的な価値判断をする科学ではない」（*ibid.*,: 154）として、ウェーバ一流の没価値論を経済学に応用したとなる。ケンブリッジ学派が市民社会における独立した個人を経済学に登場する主体とみなしているのに対して、「ロビンスは、主観的に思う主体を市民社会的な個人と考えていませんから、その経済学も単純に個人主義的であって、社会的な要素を欠いています」（*ibid.*,: 208）。

長い紹介文である檜原（1953: 1, 4）が上記の表現いくつかをそのまま用いており、また宇沢（1970）や熊谷・大石（1970）で同様の評価がなされていることからわかるように、両者の影響力は非常に大きかったと推測される。特に杉本の『近代経済学の解明』は現在でも多くの人々を魅了する古典である。杉本は末永ほど批判的な表現をせず、「理論経済学においては」と限定を付けて、「あらゆる意味において価値判断を外におかなければならない」と述べ、価値判断の働く経済学の領域まで否定していない。しかしロビンスの広範な関心は明示されず、学習者が「単純なロビンス像」に陥る危険性を回避できなかった。

#### ●1950年代（その他の翻訳など）

次のような翻訳がこれまでの調査で判明した。『戦時及び平時における経済問題: 経済の目標と機構に関する若干の反省』（1957、防衛研修所）、「経済危機に関する若干の考察」（1958、日本銀行調査局）、『古典経済学の経済政策理論』（1964）、「資本主義という環境のなかでの個人の行動」（1966、リーマン編『比

較経済体制論』、『経済発展の学説』(1971)、「インフレ予想できなかったブレトン・ウッズ体制：特別講義」(1973、『日本経済研究センター会報』)。訳者の主体を見ればわかるように、自衛隊・中央銀行・財界を始め、経済学説家、経済思想家から注目を集めていることがわかる。これらは1950年代後半から1970年代前半の翻訳であり、1957年の『本質と意義』翻訳を皮切りとしたことがわかる。

### ●まとめ

いずれの時期も一橋大学や慶應義塾大学の人脈がロビンズ導入に活躍していた(もちろん少ないながら東京大学・京都大学の人脈も流れている)。この理由は、ドイツ経済思想(歴史学派、哲学、先見主義、ウェーバーなど)と一般均衡理論の融合という場面でロビンズが語られたからである。福田徳三、そして中山伊知郎の影響力も大きかった。

1930年代は独自の観点を当初から持っていた指導的な経済学者が、ロビンズの議論に新風を認めつつ、ドイツ思想との比較を秘め、彼の思想を包括的に理解し、紹介に努めていた。そのため、ロビンズの多様な議論(方法論、一般均衡理論、国際的自由主義、政策論など)の各断面について、極めて選別的に同意したり拒絶したりした。大熊信行(1893-1977)など、ロビンズとは独立・独自に「配分原理」の優位性を説いた者、Neil Skene Smith(1901-?)のように最新のLSE情報を日本にもたらしていた者も存在した。しかし戦争の近傍になれば、経済のみならず思想も統制され、戦時経済に利用されたゴットル学派しか生き残れなくなった。

1950年代から1970年代初頭まで、再びロビンズが持続的に注目された。重田や馬場が典型であるように、ここでも多様なロビンズが掘り下げられていたが、ここに末永—杉本という影響力のある解説書が登場した。それが宇沢(1970)も踏襲する「単純化されたロビンズ」(価値中立を説くにもかかわらず、保守的な言説者)に道を開く可能性である。この状況がマルクス派・新古典派・ケインズ派の三つ巴で生じた可能性も指摘したい。すべての陣営が「経済学の科学性」を競っていた。マルクス派はロビンズを批判し、新古典派は受容した。この単純化された藁人形に対する対立は、ケインズ派が有力だった時期には目立たなかった。しかしその勢力が1980年代に入って力を落とすにつれ、逆に藁人形であったロビンズの再評価が生まれてくることになる。